

室町時代の貿易 (2)

日本という国、そして日本人という人々は、どこまでの範囲を指すのか。それらは歴史の中で常に変動してきた。事実、今日の日本の一部には、古代の行政区分をもたないところがある。沖縄県・北海道のことだ。当時、それぞれは琉球・蝦夷ヶ島と呼ばれ、日本と異なる歴史や独自の貿易を展開していた。

○琉球

●12~14 世紀の琉球

縄文文化以降も、琉球では食料採取に頼る生活が12世紀頃まで続いた。

⇒このような琉球の文化を⁽¹⁾ _____ 文化と呼ぶ。



12世紀頃から、琉球でも農耕生活が始まり、身分の格差が生じた。

→各地に現れた首長⁽²⁾ _____ が、⁽³⁾ _____ を拠点に勢力を争った。

⇒やがて北山・中山・南山の3つの勢力(三山)に統合された。

◇(3) …もとは集落の拠点施設で「城」とも表記



図1 ゴスク(勝連ゴスク)

●15 世紀の琉球

三山(北山・中山・南山)が争った。



1429年、⁽⁴⁾ _____ の王⁽⁵⁾ _____ が三山を統一し、
⁽⁶⁾ _____ を建国した。

⇒(6) は明・日本・東南アジアの諸国と貿易した。

<琉球の貿易の特徴>

⁽⁷⁾ _____

…自国の商品よりも、主に他国 A からの輸入品を
他国 B への輸出品にする貿易



尚巴志(王国の樹立者)
明の都を手本に、首里の整備を図った。また、東南アジアの商人と緊密な関係を保ち、貿易を活発化させた。
体が小さく、小按司と呼ばれたが、志は大きかった。



図2 首里城(正殿)



蘇木(左)・香木(右)
東南アジア産の植物で、蘇木は染料に香木は香料に用いられた。
琉球の中継で日本に輸入された。

琉球王国の歴史の証—琉球の酒「泡盛」

日本の焼酎の起源は、泡盛だと言われる。泡盛の製造は、14世紀、琉球王国と交流のあったシャム王国(現在のタイ)が、酒の蒸留技術を伝えて始まった(諸説あり)。江戸時代には、琉球王国から将軍への献上品として使われ、名酒と評された。なお、技術を伝えたシャムでは製造に黒麴くろこうじを利用しており、泡盛の定義はこの麴を利用していることである。そのため、泡盛の原料には安価で黒麴を作りやすいタイ米がよく選ばれる。



○蝦夷ヶ島

●13世紀の蝦夷ヶ島

縄文文化以降も、蝦夷ヶ島では食料採取に頼る生活が続いた。

⇒このような蝦夷ヶ島の文化を⁽⁸⁾ _____ 文化と呼ぶ。

⇒7世紀以降も食料採取中心であったが、次の文化に発展した。

①擦文文化（7世紀～、サハリン・蝦夷ヶ島一円から東北地方まで）

②オホーツク文化（9世紀～、オホーツク沿岸のみ）



13世紀頃、現在まで続く⁽⁹⁾ _____ の文化が形成された。

⇒津軽に勢力をもつ⁽¹⁰⁾ _____ 氏は、拠点⁽¹¹⁾ _____ で（9）と貿易した。

◇（9）…古くからの蝦夷ヶ島の先住民で、文化自体は13世紀頃に形成



図3 擦文文化



図4 オホーツク文化
＊クマ彫刻

●13～15世紀の蝦夷ヶ島

13～14世紀、安東氏は、十三湊を拠点にアイヌと貿易をした。

⇒この貿易でもたらされた鮭・昆布は、京都にも運ばれた。



15世紀、安東氏や和人が、蝦夷ヶ島の南部（道南）に進出した。

⇒道南の沿岸に和人の館が築造され、道南十二館と総称された。

◇和人…アイヌの立場からの日本人の呼称

◇倭人…中国からの日本人の呼称

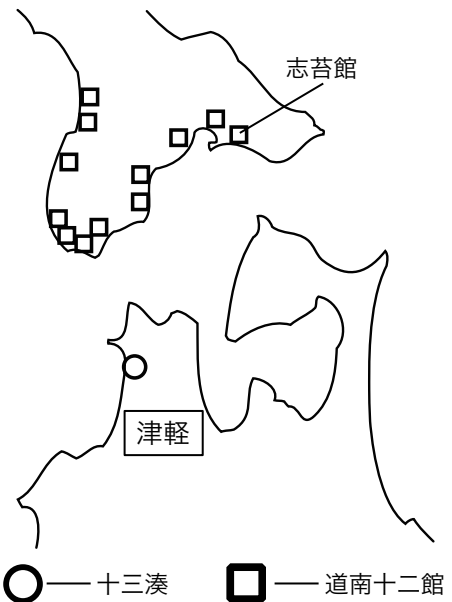


和人の道南への進出は次第にアイヌを圧迫し始めた。

⇒1457年、アイヌの首長⁽¹²⁾ _____ が蜂起した。

⇒道南の有力者の1人⁽¹³⁾ _____ 氏が（12）の蜂起を鎮め、
後に道南一帯の支配者へと成長した。

◇（13）…江戸時代、⁽¹⁴⁾ _____ 氏と改称し、大名として道南を支配



●補説—蝦夷とアイヌ

古代、日本の支配拡大に抵抗した東の人々を蝦夷と呼んだ。

⇒蝦夷には、蝦夷ヶ島のアイヌも含まれた（蝦夷⇔アイヌ）。



日本の支配拡大で、蝦夷と呼ばれる範囲が狭まっていった。

⇒中世、蝦夷はアイヌをほぼ指した（蝦夷⇔アイヌ）。

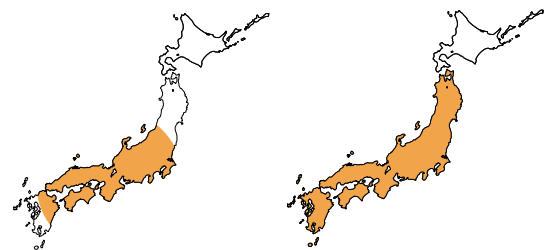


図5 日本の範囲（左：5世紀／右：13～14世紀）

アイヌの世界観—カムイとヒグマ

アイヌは、自然界の様々なものに神（カムイ）を見出し、敬虔な心で接してきた。その世界観によれば、狩猟対象の動物は、神が人間の世界を訪れた時の仮の姿であり、神は捕えられ、祀ってもらうこと（イオマンテ）で神の国へ帰れるのだという。その際に生じた肉や皮は、人間界を訪れた神からの贈り物とされた。なお、ヒグマは最高位の神キムカムイの仮の姿と考えられ、特別な存在であった。

